vol.58 2023 秋号　源流からのたより

ぽたり!

源流のひとしずく

森は、「緑のダム」

Key Word

- 未来をうつす
- 残り50%は「運営」で決まる
- 「大滝ダム」と歩み、伝えてきたこと
- 「その尊さを思い歌いたい」
- 大滝ダム誌に込めた想い
- 源流だからこそ発信できる価値

公益財団法人 吉野川紀の川源流物語
森と水の源流館
奈良県吉野郡川上村大字迫1374-1
https://www.genryuu.or.jp

未来をうつす

公益財団法人 吉野川紀の川源流物語
事務局長　尾上忠大

川上村では、大滝ダム管理開始10周年の企画として、9分間の動画プログラムをつくりました。そのタイトルは『未来をうつす』 副題に「水源地の村の思い」と添えられています。

この動画プログラムでは、自然写真家（ネイチャーフォトグラファー）内山りゅうさんが撮影された吉野川・紀の川の源流部に息づく、水や緑の自然の姿を紹介しています。

―なぜ、大滝ダムで内山さん？　みなさん、そう考えられると思います。

内山さんと川上村の出会いは2012年、森と水の源流館と川上村立図書館の10周年記念共同事業でした。当時「自然そのものの姿しか被写体にはしない」という内山さん、当然「水源地の森」を保全する村の取組みを高く評価し、その後度々撮影に入り、また全国規模のテレビの番組でお越しいただいています。しかし同時に、川上村で内山さんを魅了したものが人工林でした。時とともに積み重ねた、人々の手間や思いによって立つ樹々が、内山さんの「人工」の概念をはるかに超越したのだと思います。

大滝ダムを前に内山さんは言いました。「気候変動が目まぐるしい今日、自然と人の力を対極に捉えることだけでは語れなくなっている」

ダムは間違いなく英知を結集した人工の象徴です。しかし、そこにも時とともに積み重なった人々の思いが存在しています。「緑のダム」といわれる森林とコンクリートのダムが共存して未来を描いていく川上村。決して異なる方向を向いていない川上村からの強い思いが、内山さんには届いていて、それを表現し続けていただいているのだと思います。

「都市」と「源流学」

株式会社 乃村工藝社
第3事業本部文化環境事業部

三輪晴也さん

昨年度、開館20周年を経過した森と水の源流館。その節目に一部展示リニューアルをしました。20年前の原点での展示計画では、コンペティション（設計競技）が行われ、当初の原案が採用されました。その当時から川上村や森と水の源流館と、プランニングから設計・施工の各現場をつなぐコーディネートをされてきた三輪晴也さん。三輪さんは展示の専門会社である株式会社乃村工藝社の仕事で、全国で100件を超える施設にかかわってこられたそうです。そんな三輪さんの目に森と水の源流館はどのように映ってきたのか、お聴きしました。

―当初、どんな表現を目指したか

失礼ながら、こんな山深い小さな村で、「環境」という大きな捉え方で、自然や民俗というか、人々の暮らしのことを伝えたいという村の思いに感銘を受けました。こちらのアイデアを提案するというより、村の人々の考えや活動をできるだけ形にしていこうということだったと記憶しています。

―オープン後の森と水の源流館を見てきて感じることは

開館から2年目に総合的な学習の時間で館の利用をはたらきかけるVHSビデオを制作し、多くの学校に配布されましたが、期待ほどの反響はなかったそうです。その後、奈良県で森林環境教育の普及が進むことになり、館が「学べる屋台」という展示カートをつくり、これを館の車に載せて、学校を訪ねるというアイデアが示され、その製作に携わりました。その時にこの施設は成長しているなと思いました。配るだけでは伝わらないことを、人によって伝えようとしている。うまくいかなかったことも含めて、経験を次の展開に活かそうとする運営がこの館の強みだと思いました。

″ハード″の完成で50%
残り50%は「運営」で決まる。

―多くの展示施設を見てこられて…

乃村工藝社では、水や川に関する多くの展示施設の計画や設計、施工を手掛けています。近年では、指定管理者として施設の運営にも携わるところがあります。それらを見てきて、私が思うことは、すごくおカネをかけたからといって、いい施設になるとは限らない。おカネがあるに越したことはないが、結局はそこにいる人によって、施設の良し悪しは決まると思います。施設にいる人が何をできるかが大事です。そういうところが成長するし、持続する施設といえます。

展示には限界があるであろうし、そこに人が介在しないと魅力は伝わらない。展示は道具であり、道具を使うのは人です。人が付かなくてもよい展示、壊れない展示が望まれることも理解はできますがね。

森と水の源流館は、ずっと以前から流域とつながって活動を続けています。そしてそれをさまざまな手法で発信し続けていることは、なかなか全国でも他にないのではないかと思います。まさに運営によって展示の価値を高めている例だと思います。

―これからの森と水の源流館へ

これからも館は成長し続けないといけません。森と水の源流館のテーマ自体は変わるものではなく、はっきりしたものがあります。しかしどのようにして展示を活かしていくかは、まだまだ広がる可能性があると思います。それを担っていくのも人です。そういう意味ではここに限った話ではないですが、うまく人材のバトンタッチができるかどうかということが、施設を左右するキーになると思います。私は60歳を過ぎましたが、これからもできる限り、森と水の源流館の「運営」を楽しみに見続けていきたいと思います。

出張源流教室「学べる屋台」
たくさんの種類の本物の樹を使った触れられる展示物を納めたカートを車に載せて、学校はもちろん、ショッピングセンターやイベント会場へ出掛けた。

第45回 源流の主役たち

「大滝ダム」と歩み、伝えてきたこと。

―森と水の源流館のかかわり―

文・尾上忠大

私たち公益財団法人吉野川紀の川源流物語は、森と水の源流館の管理運営とともに、さまざまな事業を展開しています。大滝ダムの竣工式典が開催されたのが2013年。その11年前に森と水の源流館は開館しました。運用前の「大滝ダム」について、いつも何らかのかたちで考え、また多くの方々といっしょに考えることを意識して、私たちも事業のいくつかを創ってきました。おそらく、ダムを取り巻く社会情勢や環境が、計画当初とはずいぶん変化し、難しい時代に入った時期だと感じながらも、私たちも「水源地の村づくり」の一員として、大滝ダムとのかかわりによって、何かを伝えたいと、一生懸命に取組んできました。

一、望郷の碑 ぼうきょうのひ

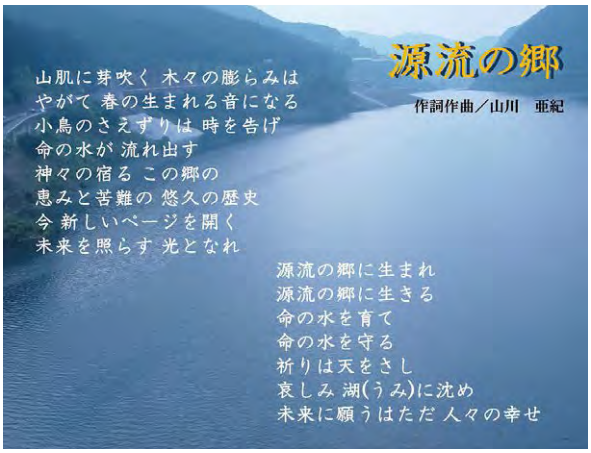
2008年、川上村はダムサイトにモニュメント広場を整備。この企画に携わりました。そこには当時の奈良県知事によって表現された「臨郷湖望大未来」という文字が刻まれています。「ふるさとの湖に臨んで、大きな未来を望む」という意味です。そこにつながる壁面には、未来を担う子どもたちが、ここを訪れたときの思い出となることを願って、川上小学校の児童たちが手がけた陶板作品をはめ込んでいます。村内「匠の聚」との連携で、彫刻家や陶芸家の先生たちの指導によるものです。そこから3年間にわたり、毎年5月には、新しい作品のお披露目イベントを行いました。

二、清流の語りべたち

望郷の碑の壁面には、かつての吉野川と人々の笑顔を思い出す「川の思い出写真」を4枚のエッチングプレートにして設置しています。これは、2000年から行った〝川の思い出あつめプロジェクト〟「思い出発掘調査隊」で、村民の方、村出身の方々などから寄せられた写真や思い出のお話で構成されたものです。それらはモニュメント整備より以前の2004年に冊子としてまとめられています。森と水の源流館で手に取ってご覧いただくこともできます。まずは、望郷の碑の前に立って、今の大滝ダム、おおたき龍神湖とかつての吉野川にみなさんの思いを寄せてみてはいかがでしょう。

三、源流の郷

大滝ダム竣工式典は、国土交通省近畿地方整備局と川上村の主催で行われました。式典の一部分を川上村のもとで企画のお手伝いをしました。このとき、ピアニスト山川亜紀さんが、この日のためにつくったオリジナルソング『源流の郷』を発表しました。そこに川上中学校の生徒たちが、コーラスで参加してくれました。毎日少しずつ時間をみつけて練習を重ねて、当日の舞台に上がりました。その後、この歌は、川上村のコーラスグループ華音によって、歌い継がれることになり、いろいろな機会で歌われました。この歌には、モチーフになった「物語」があり、歌の前にプロの役者である竹崎利信さんによって語られました。式典会場の張り詰めた空気の中で、出席者のみなさんの心に響く時間になればとの思いで取組みました。



四、ふたつの龍のはなし

最後にその「物語」についてです。この機関誌でも何度か紹介しています。ダムという大きな事業に揺れ動きながらも、それを受け入れ、いつまでも山と水を守り育てる龍神さんと村人のお話です。この絵本も森と水の源流館ほかで購入いただけます。

これからの大滝ダムと川上村の未来を思い、この物語の締めの部分を引用します。**「七夕の夜、村の人々は山のお宮さんに集まり、みんなでかがり火をたきました。湖の龍神様は、その明かりをめざして、山にのぼっていきました。村の人々は、今もふたつの龍神さまに見まもられて、山を大切にし、水を守りながら暮らしています」**

ともに！

さて、今回は―

いきいき輝く活動をご紹介

音楽家（東吉野村在住）松谷文美さんと

2017年11月16日、森と水の源流館の「源流の森シアター」を会場に 川上村「源流の日」を記念する「源流の森コンサート」を開催しました。歌っていただいたのが川上村のコーラスグループ「華音」の指導者、松谷文美（まつたにあやみ）さんです。その日、オリジナル曲やみんなに親しみやすい数々の歌とともに心に残った言葉があります。

「森は水の源、水は命の源。その尊さを思い歌いたい。」

会場に入りきれないほどにお集まりいただいた方々にやさしい歌声が響きわたった一日でした。

その後、松谷さんから「もっと源流のことを知ってもらいたい」「子どもたちに、わかりやすく、印象に残る歌で伝えられないか」という話があり、『水の旅のはなし』（作曲：松谷さん 作詞：尾上事務局長）ができました。同じく「わりばしの歌」などもつくりました。松谷さんは、今これらを歌いながら、和歌山市、橋本市、奈良市のほか流域の小学校で、〝水のつながり〟を伝えています。

「源流の村で暮らし、きれいな川の横をいつも車で走りながら、その水がどこに流れているのか考えたこともありませんでした」と話す松谷さん。『水の旅のはなし』の歌を創ったことを機に、和歌山の海とつながっていることや吉野川分水の恩恵などをあらためて知り、深く考えるようになったそうです。「つながっているんだ！」そう思った時の感動は、今でも忘れられないとのことで、それを子どもたちに伝えています。

この歌とともに、そしてすべての流域の人たちとともに川を守りたい!! そんな気持ちでこれからも水のつながり、尊さを多くの人へ歌で伝えていきたいと語ってくれました。

松谷文美さんからのメッセージ

自然も人も全て繋がっています。
共に守ろう!! 命の源…
水・森・川

これからも心を込めて 歌い続けます♪

時とつながる

大滝ダム誌に込めた想い

かわかみ源流ツーリズム　坂口 泰一

川上村の暮らしを一変させる出来事の一つがダム事業です。戦後復興を目的とした十津川・紀の川総合開発事業における渇水対策用の大迫ダム、昭和34年の伊勢湾台風による甚大な被害が契機となった洪水対策用の大滝ダム、二つのダムが計画から完成まで半世紀を要して川上村に建設されました。

今では当たり前となっているダムのある風景はどのように創り上げられてきたのでしょうか。平成30年3月に刊行された「大滝ダム誌―おおたき龍神湖誕生物語―」には、大滝ダム事業の建設経緯のみならず、事業の受入れから水源地の村づくりへの展開、未来への村づくりへの期待などが綴られています。

大滝ダム管理開始十周年の節目に、あらためて大滝ダム誌を手にとっていただきたいという思いから、五年間にわたって大滝ダム誌を編纂された坂口泰一氏に大滝ダム誌に込めた想いをお聴きしました。

時代の転換点を“今”に伝える

大滝ダム事業の幾度かの転換点となる時代には、必ずカギとなり信念をもった人物が登場してきた。このことは、未来を担う世代にとって大いに参考になると考え、それぞれの転換点ごとに時代背景や課題に応じ、創意工夫と決断をしていく様子を記した。

私自身がダム事業に関わっていなかった時代の様子は、文献や議事録などから事実を抽出することに注力した。企画課（ダム対策課）に所属してからは、「ダムで栄えた村は無い」と言われることへの挑戦を合言葉に、川上村自らの手で発展の糸口を掴み、「ダム後の村づくり」を考え、行動化を促す川上村第三次総合計画「吉野川源流物語」を策定し、水源地の村づくりを推進していく様子を綴った。時同じくして、ダム事業者の立場で「ダムも造るが村も創る」を信念とした工事事務所長の話など、本文では書ききれないエピソードはコラムを活用して紹介した。

課題解決の糸口を読み解く

川上村は吉野川・紀の川最上流に位置し、大迫ダム、大滝ダムに貯めた豊かな水を下流に流し続ける役割を果たす。ダムとの共生を覚悟した以上、川上村で人々が暮らし続けられるようにしなければならない。二つのダムを活用し、水源地の村として自ら発信・行動することが村の発展と下流の暮しを守っていくことにつながる。その決意を表したものこそが「川上宣言」だ。その具現化として吉野川源流に残された手つかずの原生林を「吉野川源流-水源地の森」として購入し、この緑のダムを含む三つのダムによる全国でも先駆的な村づくりの取り組みを進めた。ダムは時代によって期待される役割が変化する。それに応じた創意工夫の手法を大滝ダム誌は伝えている。節目を迎えた今、目の前にある風景の意味を考え、大滝ダム誌を手に取ることで、それぞれが直面する課題の解決の糸口を見いだしていただきたい。

聞き手：森と水の源流館　髙田 裕市・古山 暁

プロフィール

元川上村役場職員（71歳）。企画課（今の水源地課）で約25年にわたりダム対策をはじめ、諸事業の企画に携わる。「水源地の村づくり」を掲げた第三次総合計画「吉野川源流物語」の策定と、以後の村づくりに尽力。また、「森と水の源流館」を運営する現公益財団法人の設立時より事務局長を務める。平成25年に役場を退職。大滝ダム竣工式から五ヶ年をかけて大滝ダム誌をまとめた。

※大滝ダム誌は、川上村立図書館、奈良県立図書情報館で閲覧できます。

事業レポート

源流だからこそ発信できる価値 水源地の村づくりって奥深い！

公益財団法人吉野川紀の川源流物語
事務局次長　髙田　裕市

大滝ダム管理開始10周年記念 職員研修会

9月22日

大滝ダム管理開始10周年の節目に、「大滝ダム誌の読み方」と題し、元役場職員の坂口氏を講師に招き職員研修会を企画・実施しました。若手職員の方々には、水源地の村づくりの本格的始動の契機となった大滝ダム建設事業との関係や経緯を知る機会になり、また「ダム後の村づくり」に携わってこられた方々には、改めて大滝ダム誌を読み返す機運の醸成につながったなどの声をいただきました。

研修後、「川上村は水源地の村づくりというテーマが明確でいいね！」と鳥羽市観光協会からいただいた助言がふと浮かびました。水源地の村づくりは、吉野川紀の川源流に川上村が位置することそのものが価値であることを意識し、推進していくべきであることを再認識する良い機会になりました。

柿の葉寿司づくり体験（かわかみ源流ツーリズム）

5月18日

かわかみ源流ツーリズムプログラム「柿の葉寿司づくり体験」を、西河の民宿紺ちゃん離れの古民家で企画・実施しました。「なんか懐かして、涙出てくるわ～」参加者から発せられた一言です。鯖をすいて、型に酢飯と鯖を入れてギューッと押し、柿の葉で巻いて木箱に入れて完成。そんな工程を子どもの頃に手伝っていた望郷の念がこみあげてきたのでしょうか。参加者は帰宅後も体験話で盛り上がり、懐かしい川上村の柿の葉寿司を取り寄せて故郷の味を楽しんだそうです。

企画展 吉野川・紀の川 流域の生きもの

7月20日～10月1日

令和5年度企画展は流域の生物多様性がテーマで、和歌山県立自然博物館と共同調査をした過去3カ年の成果をトンボ類、上・中・下流域の魚類及び同館独自調査のカニ類の標本と解説を展示して発表。設営作業の手伝いをするなか、その集大成に圧巻されました。期間中は、多くのご来館があり、150名の方にアンケートのご協力をいただきました。

「未来への風景づくり」（企業等による草刈りや植樹）

9月～10月

「未来への風景づくり」を皆様はご存じですか？12のオーナー企業や団体が研修や交流の場として、旧白屋地区の宅地跡において草刈りや植樹などを協働で行っている活動で、当館の区画では木匠塾や源流人会さん達が環境保全活動で汗を流しています。活動の際には当館の資料等をお持ちして、かつての暮らしの風景を想像いただきながら、植樹する場所や樹種、ベンチの設営や交流場所づくりなどを検討いただきます。企業や学生さんからは、村民さんをはじめ皆様の「憩いの場になってこそやりがいが生まれる」との声をいただいています。このような旧白屋地区に関わる人々の意見をつなげることで、豊かな暮らしの風景を感じる「未来への風景づくり～文化的景観～」として参画価値を高めていきます。

このように個別の事業を推進していても、携わっていただく方々の声を事業に転換していくにつれひとまとまりとなり、水源地の村づくりや流域の活動を進める原動力になるのだと気づき、私自身もさらにやりがいを感じているところです。ひきつづき皆様のお声をお待ちしています。

源流人募集

源流人とは　かけがえのない水を生む源流の自然とそこから海や都市へとつながる様々なものを愛する人です。

源流人会とは　集い、話し、学び、遊び、考え、触れ、交流し、参加し、喜びを分かち合いながら、源流を守り、育ててゆこうとする会です。

2023年度入会特典
川上村ポケット図鑑
※写真はイメージです。

年会費

個人	2,000円
家族	3,000円
学生	1,000円
団体	10,000円

郵便振替
00940-1-331163

森守（もりもり）募金

にご協力ありがとうございました。

令和４年度は、196,475円の森守募金をお預かりし、環境保全啓発のためのパンフレット増刷や看板の製作を行いました。

源流域の環境保全は
みなさまの善意に支えられています。
ひきつづき、ご協力をお願いいたします。

郵便振替 00950-2-331164「水源地の森守募金」あて

表紙の写真：「はじまりの一雫」

発行日:令和5年11月16日（川上村「源流の日」）
発行所:公益財団法人吉野川紀の川源流物語　森と水の源流館
TEL:0746-52-0888